

『商魂 勝ち残る経営 倒産社長の欠点に学ぶ商売のタブー』より抜粋

「八起会」会長 野口誠一著
1985(昭和60)年7月発刊

第一章 お前らとはデキが違うわ！

お人好し経営者は倒産予備軍である！ (p.12)

人の好さと甘さと無責任のあらわれ (p.14)

自分が倒産するとは誰も思っていない (p.18)

倒産の五大要因 (p.20～p.21)

- ①経営努力の不足
- ②売り上げの減少
- ③保証人を引き受けるなどの過失
- ④連鎖倒産
- ⑤放漫経営

倒産を恐れることが最良の防止策だ (p.62～p.63)

- ・倒産とはいかなるものか、倒産するとどうなるのか、倒産しないためにはどうしたらいいか・・・
といったことを考え、そうならないよう準備する前提として、倒産のこわさを知っておくべきだ。

第二章 経営は非情なドラマだ

経営は非情なドラマだ (p.76)

無知は罪悪である (p.87)

- ・無知という形容は適当でないかも知れないが、中小企業の経営者には無知としか言いようのない経営者がものすごく多い。まず数字にからきし弱い。
それから手形、小切手を発行しながら、その基本知識がまるでない。

男の弱さは責任感から (p.110～p.111)

- ・倒産という事件を迎えて、苦しむことは男も女も変わらない。だが精神状態は違うのだ。
男は代表取締役社長としての責任感から深刻に考えすぎてしまうのだろう。

絶対に倒産に追い込まれるな (p.121～p.122)

- ・倒産しないためにもっともっと倒産の実態を知り、日頃からいざという時のために備えておく
ことが必要であると思う。

第三章 あなたの会社は大丈夫か -倒産しないための倒産学-

倒産してからでは遅い！ (p.124～p.125)

- ・「その教訓を生かしてやり直せばいい」などと言葉ではいくらでも言えるが、現実はどうかといえ、倒産した人間の再起の確率はきわめて低いのである。

会社は数字の勝負、借金に不感症になるな (p.130)

わからないことは専門家に聞け (p.133)

従業員管理の失敗は倒産の元凶 (p.139～p.140)

- ・わたしはこの社長がおかした誤りはたった一つのことだと思う。それは破格の待遇を与えすぎたことだ。

第四章 かくして、かくなつた ー倒産体験者の実態ー

自殺を思いとどまったとたん事故死の不運 (p.198)

- ・倒産者の中にも強い、弱いはある。見ていると、執念をもやしている人間のほうが、運は強いようだ。

見栄と過信が命取り (p.199)

- ・倒産経験者に共通するのは、見栄をはることと自己過信であることは、すでに述べてきた通り。

不勉強な人間にはチャンスも訪れない (p.235～p.236)

- ・わたしは人生というものの実力三分、運七分とってるんですが、その運七分を求めるには、自分より上の人間、すぐれている人間と接しなければチャンスというものにはぜんぜん恵まれてこない。

つまるところは甘さが倒産を招く (p.246～p.247)

- ・この二つとも逆のことをしている。つまり倒産しないための準備、倒産を恐れる心がまずない。恐れるというのはいたずらにおびえるという意味ではなく、倒産の怖さをよく知って、防止策を講じることだ。
- ・これからわたしたちに必要なのは、経営というものに対する客観性ということだろう。

倒産は財産である (p.247～p.249)

- ・中小企業の場合は「企業は社長なり」である。
- ・社長に頼るしかないのである。会社のスケールは社長のスケールだ。
- ・わたしはもう違う。精いっぱい生きた満足感があれば十分です。
そう思うようになったら金が大切に見えてきました」

第五章 負けてたまるか！ ー再起する条件15カ条ー

再起する条件は倒産しない条件に通じる (p.252～p.253)

〔再起する条件15カ条〕

1. 人の言に左右されず自分自身の確固たる信念を持つ
2. 目標を必ず設定する
3. 誠実さは最大の武器と知れ
4. 既成概念にとらわれるな
5. 生活環境、人間関係を変えよ
6. 名参謀(相談者)を持つ
7. 手と足を使い、汗を流せ
8. 二等兵になったつもりでやれ
9. 欲にまどわされるな
10. 順応性、適応性を持つ
11. 絶対に病気はするな
12. 最新情報に敏感であれ
13. 見栄と思いがりを捨てよ
14. 不満をなくし奉仕の精神を持つ
15. 自分が幸福になることを信じよ